

令和5年度 兵庫県立松陽高等学校(全日制課程)学校自己評価アンケート用紙

		【平均】よくできた(5点) できた(4点) あまりできなかった(2点) できなかった(1点)		R5 活動評価		来年度の改善策		
重点事項	年度努力事項(評価項目)	実施目標	評価内容	経年比較				
				R4	R5			
基本的な生活習慣を確立させる指導の工夫・改善を図る。	全教職員の意思統一が図られた生徒指導を実践する。	1	生徒指導(基本的な生活習慣の確立)について、指導部や研修会等を実施し、共通理解が図られた生徒指導が実施されている。	3.8	4.0	<ul style="list-style-type: none"> 学年、教員によって指導の差がありすぎて、それに関するクレームが多かった。 もう少し生徒指導における研修会的なものがあったら良い。 定期的な指導部会議、Groomでの議事録の共有、イエローカード項目や防寒具等適宜文化して共有することにより、できる限り共通理解を図ろうとする努力がなされた。 職員全体で継続的に取り組んでいく必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 学年、教員間で指導の差がないように、より一層明文化、情報共有に努め、共通理解を図っていく 生徒対応や保護者対応における課題を事案ごとに明示し、研修を図る。 	
		2	いじめ問題に対して組織的な対応ができています。	4.4	4.5	<ul style="list-style-type: none"> 学年と生徒指導部が連携して、即座にいじめ対応委員会を開き、情報共有や対応の協議がなされた。 いじめアンケートや状況に応じて聞き取りを行い、対応ができています。 学校全体として、いじめ問題には真摯に取り組む雰囲気がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒指導部に相談しやすい雰囲気を作っていく。 些細なことでも生徒情報をオープンにし、教員一人で抱え込むことがないよう、組織的に対応する。 いじめアンケートや生徒の日常の様子を観察等により、いじめの未然防止、早期発見に努める。 	
	学校と家庭との連携強化が図られた指導を実践する。	3	学校HP、学校新聞、学年便り等、学校の教育活動や方針について情報発信がなされている。	4.5	4.1	<ul style="list-style-type: none"> 随時HPが更新され、情報が公開されている。 月に1回の学年通信を配布して、学年の情報発信を行った。 取り組みについてはアップされているが、もう少しHPを充実させたい。 	<ul style="list-style-type: none"> HPの更新の方法をシステム化し、すべての教員が担当している事柄について情報公開しやすくする。 	
		4	家庭連絡や家庭訪問、PTA活動を通して、保護者との情報交換や意志の疎通を図り、教育活動や行事で保護者との協働体制が確立されている。	4.3	4.1	<ul style="list-style-type: none"> 家庭訪問に関しては、学年団が協力的で2人以上でいつも対応できている。 何かあれば即日保護者と連絡を取り、指導への理解を求め、トラブルの未然防止を心がけた。 家庭連絡を定期的に行うが、保護者へ連絡が繋がらないことが多い。 保護者が積極的に関わっていただいているおかげで情報交換を密に行うことができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 家庭連絡や家庭訪問等で、学年や部、学科との連携を深めることができている。PTA活動も、保護者が積極的に関わってくれている。継続していきたい。 	
	生徒のマナーや規律・規範意識の高揚を図る。	5	教育活動全般を通じて、マナーや規律などを守る取り組みや、立ち番指導などを通じて、通学マナーを向上させるための取組が行われている。	4.0	4.0	<ul style="list-style-type: none"> 校内でのマナーはよくなってきているように思うが、登下校に関してはまだまだ指導が必要であり、自分がよければいいと考える生徒が非常に多いため、自転車でも確認せずに道路を横切る生徒が多い、危険である。 学校外の踏切付近にも職員が立ち、生徒の交通マナーの向上に取り組んでいる。 下校マナーが悪いと外部から苦情の連絡が多いので、課題である。 	<ul style="list-style-type: none"> イエローカード指導や立ち番指導、身だしなみマナー向上プロジェクト等を活用し、粘り強く指導していく。 下校指導のシフトが成立するよう呼びかけ続ける。 	
		6	生徒のマナーや規範意識を高めるため、家庭や関係機関と連携した取り組みが行われている。	3.8	3.7	<ul style="list-style-type: none"> 家庭との温度差が大きいと感じる。 家庭連絡を行うことで家でも注意していただくことができ、親の協力が得られた。 PTAも協力的で非常に良い形で指導できている。 イエローカード指導により、保護者との連絡や面談の機会を通じて、マナー向上に向けて理解を求めた。必要があれば、学習連携も実施した。 	<ul style="list-style-type: none"> 問題が起きた時だけでなく、良いことも家庭に連絡することで、家庭との信頼関係を築く。 必要があれば、躊躇することなく学習連系や関係機関、PTAの協力を得ながら指導していく。 	
分かる授業、楽しい授業を展開し、基礎学力の定着を図る。	分かる授業、楽しい授業をするために、学習指導の工夫・改善に努める。	7	授業研究など学習指導について「アクティブラーニング」の観点を取り入れICT機器を活用するなど工夫・改善がなされている。	4.0	4.1	<ul style="list-style-type: none"> ICT機器の活用はスタンダードになりつつあるが、本校においてのアクティブラーニングの形はまだまだ試行していく必要がある。 卒業時にどの程度の学力を達成するか、という目標設定が欲しい。 生徒の端末をipadにするのであれば、教員側もipadにしてほしい。OSが違うと不便になることも多い。 グラフ表示アプリのようなオフラインでも起動できるアプリもあるが、アプリをインストールできないのでインターネット上のHP等を利用している。しかしネット回線の状況で上手く繋がらないこともあり、授業の進行が遅ることもある。 	<ul style="list-style-type: none"> ICTリーダーのシステムを効果的に活用し、教員が個々に実践しているICT活用に関する情報共有を定期的実施する。 卒業時の学力の到達目標は、進路指導部と連携して生徒の進路実現と合わせて考えていく。職員全体で、基本的な学力の向上を目的とした教育課程が実施できるように指導する。 ICTのハード面については、教務部単体では解決が難しいのが現状である。様々な要望があることは承知しており、それらに優先順位をつけて関係部署等と協議していく。 	
		8	一般公開も含めた授業公開が、各教科において実施されている。	3.6	3.7	<ul style="list-style-type: none"> 教室環境やiPadなどが整っており、それを用いている教員が多い。 公開授業の期間はあがるが、実際、見に来る教員が少なく感じる。 指導案を作成している授業に関しては、見に行けたが、それ以外は行っていない。 公開授業週間に活用されている。事前事後の検討会や、年間を通した研究課題を設定する等、研鑽を進めることが今後の発展として求められる。 	<ul style="list-style-type: none"> 今年度は「集中して授業を受ける雰囲気づくり」「教員の指導力向上」を目的に公開授業週間を設置した。来年度は、これらの目標がより明確化して、継続的に実施していく。 多くの教員が公開授業に出席しやすいよう、時間割上の配慮を行う。 教室の扉の問題については、改めて教員全体で趣旨を共通理解してから授業公開に臨む。 	
		9	校内研修を実施したり、校外研修会に参加するなど、学習方法や教科指導の工夫改善が図られている。	3.8	3.5	<ul style="list-style-type: none"> 定期的に授業公開が実施されているが、教室の扉が閉まっており様子を確認できない。授業担当者が環境を整える必要がある。 教科指導について教員同士で話し合うことがあまりない。 ロイノート研修会は継続的に行うことで効果が出てくる。 ICT委員会の提言により、教科ごとに研修を行った。 12年生対象の基礎力診断テスト、oneweekトライアル等の取り組みがよかった。 本校は新しい試みを実施しやすい雰囲気がある。 Classiでは講師を招いての研修会が行われ、工夫改善を図ることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ICTリーダーのシステムには、まだまだ改良の余地がある。ICTを用いた様々な取り組みがなされているが、活用方法の共有ができていないため、継続してICTに関する研修、またはICTリーダーの会議を開催する。 Oneweek トライアルに関する取り組みも継続的に実施する。 	
		10	多様な学習指導と適切な課題や補習、家庭学習の習慣化を図る。	3.6	3.3	<ul style="list-style-type: none"> 放課後の補習等になかなか時間をかけられないことは大きな課題である。 放課後等を利用して、指導ができています。 少人数授業やITの授業では個別対応もできたが、あくまで集団指導の域を出ていないと感じる。 クラス内での学力差がある中、各教員によって「わかる」授業が心がけられている。 個に応じた指導のためには教員の余裕が必要だと感じる。 ロイノートを活用し個別学習を進めることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒への補習の提供については、商業科・生活文化科は十分にできていない一方、普通科においては十分にできていない現状である。生徒の進路希望に合わせて、必要な内容を、望ましい形態でおこなうことが効果的であると考え。「ただやるだけ」では、個人的な自己満足にとどまってしまう。 生徒の実態に即しながら、各教員が個性を生かした、さまざまな工夫を凝らして、学習効果を高めることができていると感じている。その結果として、ほとんどの生徒が希望する進路実現を得ている。 	
	生徒の興味・関心・進路に応じた教育活動を展開する。	11	課題や補習を通して、家庭学習の習慣化や基礎学力の定着、資格取得につなげている。	3.4	3.1	<ul style="list-style-type: none"> 放課後等を利用して、指導ができています。 家庭学習の習慣づけ、基礎学力の定着等、全体のシステムで取り組むことができればよい。 勉強をすることに意義を感じない生徒が多く、家庭学習に繋がらない。普段の授業の中でも、勉強の意義について指導が必要であると感じる。 商業科や生活文化科では授業や補習を通して資格取得を目指している。また、普通科でも就職に必要となるような資格取得を目指している生徒がいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 進路実現、とくに進学においては、家庭学習は必要不可欠であるので、自主的であることが理想ではあるが、初期段階においては、学習のスケジュール管理を、生徒・教師で双方向に共有して、適切な方向を示していくなどの取り組みも必要である。 近年、SNSからの情報に接触する機会が増えたことで、生徒の実態に即していない学習内容や教材に取り組んでいる姿が散見している。実態に応じた適切な学習の方法や内容を、個別的に指導していくことで、左記の課題にも向き合っていくと考える。 	
		12	総合的な探究(学習)の時間では、「生きる力」「キャリア教育」を意識した教育が行われている。	3.5	3.4	<ul style="list-style-type: none"> 「防災」の枠組みにしばられて、担当はその時間を乗り切る内容を準備するだけで精一杯である。 2年生、3年生の特色類型の総合的な探究において、カリキュラム作成、進行に難しさを感じた。 生徒自身が「防災に興味がない」、「自分は災害に遭わない」と感じていることが多く、もしもの時のことを考えさせることに苦勞している。また「成績に関係ない」から授業を受ける意味が無いというような態度の生徒も見られる。 本校は防災教育を入れていることもあり、ボランティアに興味関心をもって自ら参加を希望する生徒も多い。 「防災」というテーマに対して教員が提示するものに反応をさせるものになっている。自分事となるような工夫が必要。 生活文化科の選択科目は自らというよりは消去法による選択になっているように思う。多様になった方がよいと思うが、現在の各教員のコマ数を考えると難しい現状がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 総合が、「学習」から「探究」の時間に代わり、カリキュラムが1周(3年間)した。その大枠はできているので、さらにアップデートしていく。 本校は、防災教育に特化してきた。今後、生徒の取り組み状況や内容を考慮しながら、探究活動をすすめていく。 	
		13	生徒の進路希望に応じたカリキュラムや多様な選択科目が設定されている。	3.5	3.4	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の進路希望が明確でないため、1年生のうちから一貫した進路指導が必要だと感じる。その上で、カリキュラムを改良する余地はある。 進路の多様性が本校の特徴である。そのため、授業内での工夫で全生徒の進路実現に向けた取り組みが行われている。 生徒が進路について興味を薄くするように感じる。 	<ul style="list-style-type: none"> 進路指導部、科、学年との連携をより密にし、年々変わっていく、とくに進学情報を情報共有して、生徒に還元していくようにする。 ある年度の事象に敏感に反応して、何でも変えていくのではなく、現状をしっかりと精査して、良いものは残していくことは保守的思想ではなく、むしろ現状を直視していることであると感じる。 	
		14	地域の人材や素材を活用した特色ある授業の取組が行われている。	4.1	4.0	<ul style="list-style-type: none"> 商業科、生活文化科を中心として地域と繋がった学習が行われている。 商業科のアントレプレナーや生活文化科の保育実習などの授業内容が当てはまる。 地域の和太鼓奏者の方を講師に招き、生徒生徒が定期的に和太鼓やしゃんしゃんに取り組んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 高砂商工会議所と連携しながら、より地域と密着し、地域活性化について考えていく。 販売活動の幅を広げ、地域特産品についてもより広く知ってもらえるよう宣伝活動を強化する。 	
	望ましい人間関係を築き、生徒の生命と財産が守られ、差別のない安全な学校環境を構築する。	生徒一人ひとりに居場所があり、温かい人間関係が築ける学級経営を行う。	15	クラスの中で、他人を馬鹿にしたり、からかったりせず、互いを認め合う好ましい人間関係が築かれている。	2.5	2.3	<ul style="list-style-type: none"> 人間関係を構築していくのが非常に難しく感じる。ペアワークやグループワークがうまくいかないことが多かったり、人間関係で悩む生徒が非常に多い。 環境の問題なのか、表現力が乏しいか、生徒の言葉使いが悪い。 教員が注意すればルールが守れるが、さらに学校が落ち着くには生徒同士で注意し合えるようになることだと考える。 表現力がないために誤解を生んでトラブルになることが多い。 おもしろい中傷するようなことを発してしまうことがあるが、都度注意することで生徒は素直に受け入れることができている。 	<ul style="list-style-type: none"> 副担任制度の積極的な活用。学年団以外の先生の積極的な関わりが必要だと感じる。 生徒の規範意識を育む取り組みを行う。今年度の人権HRでは担当教員の発表で絵本を使って他者に対する言葉がけを考えたり、SNSでのやりとりを考えたりと生徒の実態に即した授業を行った。 人権教育の推進 他者や社会、組織に貢献する機会を増やし自己有用感を育む
			16	生徒の個人面談や日頃の声かけ指導等ができています。	4.3	4.2	<ul style="list-style-type: none"> 担任は変化に気付きやすいので、声をかけられるが、関わりが少ない生徒へは十分な声掛けができていないように思う。副担任制度をもっと有効に活用すれば、生徒も話しやすい先生が増えると思う。 担任や学年団の先生だけでなく、面談週間を利用して多くの先生方に面談してもらえようという体制づくりが必要である。 本校は丁寧な対応を続けている。これはどの学校にも真似できないレベルである。 	<ul style="list-style-type: none"> 各学期ごとに面談週間を設け、担任の先生以外にも授業等で関りのある先生が面談をするような機会を作る。
		防災教育、安全教育の充実を図る。	17	避難訓練や交通ルールを遵守する指導等、参加型・体験的な教育活動が実施されている。	3.4	3.5	<ul style="list-style-type: none"> 今回の避難訓練を通して、生徒の避難の仕方や体の不自由な生徒への対応等の必要性を感じた。 緊張感のある避難訓練を実施することができた。 体験的なものをもっと取り入れられればよい。 	<ul style="list-style-type: none"> 水消火だけの疑似体験訓練のみで、火災訓練ができなかったため、来年度は取り入れていく。
			18	地域の関係機関や外部講師を活用して、生徒の防災意識、安全意識の高揚が図られている。	3.5	3.6	<ul style="list-style-type: none"> 2月の消防士を招いての防災訓練はよかった。教員側の意識向上も重要である。 外部講師は消防隊の方が来られた1回と、自転車についての1回だけだったと記憶する。 外部と連携した防災教育は少ない。 	<ul style="list-style-type: none"> 総合的な探究とも関連させながら、講演会等充実させていく。
		人権教育を充実させ、人権意識の高揚を図る。	19	人権教育が3年間を見通した年間指導計画に基づき、計画的に実施されている。	3.4	3.4	<ul style="list-style-type: none"> 人権教育は講演会や映画鑑賞などで計画的にも、日ごとの声かけなど実践的にも行われている。 3年間の計画を見通しながら、1年目の人権教育を行っている。 計画通り行うことができています。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の実態も考慮していきながら、柔軟に内容を精査していく。
			20	職員研修や講演会や映画会等を通して、生徒・職員の人権意識を高める取組が行われている。	3.7	3.6	<ul style="list-style-type: none"> 講演会よりも映画のような映像の方が生徒はよく聞いているように思う。 今年度は人権教育に明るい教員が勤務していたため、生徒の実情に合わせた講演となり、とても良い取り組みであった。 担当教員の主導のもと、動画などさまざまな教材を活用し研鑽に努めることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の実態も考慮していきながら、柔軟に内容を精査していく。
<p>学校関係者評価委員会からの提言</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒がHPに興味を持つように、生徒に記事を任せる等の能動的な仕掛けが有効である。 読書量は学力に直結するので、読書の仕方を教えることが重要である。 効果的な授業者は、授業の始めに授業目標を明確にし、理解度を確認しながら授業を進め、最後に目標到達度を再確認し、フィードバックしている。優れた教育力をもつ教員から学ぶことが大切である。 社会で活躍している人材は、「あいさつができる、学ぶ力がある、継続する力がある、コミュニケーション能力がある、周りの意見を素直に吸収できる、好奇心が旺盛である、人に対する気配りができる、人のために頑張れる」という特徴がある。学校で育ててほしい力である。 学校評価については結果を生徒と共有し、忌憚のない話し合いがあってもよい。 								
<ul style="list-style-type: none"> 学校綱領の「明朗進取・自治共同」にのっとり、生徒の教育に取り組んでいる。教員と生徒の関係も良好である。クラブ活動の充実が課題である。 昨年の活動と比較して、課題を認識し、改善に取り組んでいる。定評確認の視点でもよい取り組みである ICT教育、クラウドの活用等、次世代技術を活用できている。 								